

一握の砂

石川啄木



函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるものの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。

また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相^{ちか}邇きをたづねて仮にわかつてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の紀念なり。

我を愛する歌

東海とうかいの小島こじまの磯いその白砂しらすなに

われ泣なきぬれて

蟹かにとたはむる

頬ほにつたふ

なみだのごはず

一握いちあくの砂すなを示しめしし人を忘れず

大海だいかいにむかひて一人ひとり

七八日ななやうか

泣きなむとすと家を出でにき

いたく錆びしピストル出でぬ

すなやま
砂山の

砂を指もて掘りてありしに

ひと夜さに嵐来りて築きたる

この砂山は

なに
はか
何の墓ぞも

砂山の砂に腹這ひ

初恋の

いたみを遠くおもひ出づる日

砂山の裾すそによこたはる流木りうぼくに

あたり見まはし

物もの言いひてみる

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握にぎれば指のあひだより落つ

しつとりと

なみだを吸すへる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな

大^{だい}という字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰り来^{きた}れり

目さまして猶^{なほ}起^おき出^いでぬ児^この癖^{くせ}は

かなしき癖^{くせ}ぞ

母^{はは}よ咎^{とが}むな

ひと塊^{くれ}の土^{つち}に涎^{よだれ}し

泣^なく母^{はは}の肖^{にがほ}顔^{がほ}つくりぬ

かなしくもあるか

燈^ほ影^{かげ}なき室^{しつ}に我^{われ}あり

父と母

壁のなかより杖つゑつきて出いづ

たはむれに母を背せ負おひて

そのあまり軽かろきに泣なきて

三歩あゆまず

飄へう然ぜんと家を出いでては

飄然と歸りし癖よ

友はわらへど

ふるさとの父の咳せきする度たびに斯かく

咳いの出いづるや

病めばはかなし

わが泣くを少女等をとめらきかば

病犬やまいぬの

月に吠ほゆるに似たりといふらむ

何処いづくやらむかすかに虫のなくごとき

こころ細ほそさを

今日けふもおぼゆる

いと暗くらき

穴あなに心を吸すはれゆくごとく思ひて

つかれて眠る

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕^し遂^とげて死なむと思ふ

こみ合^あへる電車の隅^{すみ}に

ちぢこまる

ゆふべゆふべの我のいとしさ

浅草^{あさくさ}の夜^よのにぎはひに

まぎれ入^いり

まぎれ出^いで来^きしさびしき心

愛犬あいけんの耳斬きりてみぬ

あはれこれも

物うに倦うみたる心にかあらむ

鏡かがみとり

能あたふかぎりのさまさまの顔かほをしてみぬ

泣なき飽あきし時

なみだなみだ

不思議ふしぎなるかな

それをもて洗あらへば心戯おどけたくなれり

呆あきれたる母の言葉ことばに

気がつけば
茶碗ちやわんを箸はしもてたた敲たたきてありき

草に臥ねて

おもふことなし

わが額ぬかに糞ふんして鳥は空に遊べり

わが髭ひげの

下向くせく癖くせがいきどほろし

このごろ憎にくき男おとこに似たれば

森の奥より銃じゅうせい声聞ゆ

あはれあはれ

みづか
自ら死ぬる音のよろしき

たいぼく
大木の幹みきに耳あて

こはんいち
小半日

かた
堅き皮をばむしりてありき

「さばかりの事に死ぬるや」

「さばかりの事に生くるや」

よ
止せ止せ問答

まれにある

たひら
この平なる心には

時計の鳴るもおもしろく聴きく

ふと深き怖れを覚え

ぢつとして

やがて静かに臍ほそをまさぐる

高山たかやまのいただきに登り

なにがなしに帽子ぼうしをふりて

下くだり来しかな

何処どこやらに沢山たくさんの人があらそひて

鬮くじ引ひくごとし

われも引きたし

怒る時いか

かならずひとつ鉢はちを割わり

九百九十九割くひやくくじふくりて死なまし

いつも逢あふ電車こをとこの中の小男こをとこの

稜かどある眼まなこ

このごろ気になる

鏡屋かがみやの前まへに来て

ふと驚おどろきぬ

見みすぼらしげあゆに歩あゆむものかも

何なにとなく汽車くるまに乗りのりたく思おもひしのみ

汽車を下りしに
ゆくところなし

あきや
空家に入り

たばこ
煙草のみたることありき

あはれただ一人居たきばかりに

何がなしに

さびしくなれば出で
あるく男となりて

みつき
三月にもなれり

やはらかに積れる雪に

ほ
熱てる頬を埋むるとき

恋してみたし

かなしきは

飽あくなき利り己この一念を

持てあましたる男にありけり

手も足も

室へやいっぱいに投げ出だして

やがて静かに起きかへるかな

ももとせ

百年の長き眠りの覚さめしごと

呶あくび呻してまし

思ふことなしに

腕うで拱くみて

このごろ思ふ

大おほいなる敵てき目の前に躍をどり出いでよと

手が白く

且かつ大だいなりき

非ひ凡ぼんなる人といはるる男に会あひしに

こころよく

人を讚ほめてみたくなりにけり

利り己この心に倦うめるさびしさ

雨降れば

わが家いへの人誰たれも誰も沈める顔す

雨霽はれよかし

高きより飛びおりるごとき心もて

この一生を

終るすべなきか

この日頃

ひそかに胸にやどりたる悔くあり

われを笑はしめざり

へつらひを聞けば

腹立はらだつわがこころ

あまりに我を知るがかなしき

知らぬ家いへたたき起して

遁にげ来るがおもしろかりし

昔の恋しき

非凡ひぼんなる人のごとくにふるまへる

後のちのさびしきは

何なににかたぐへむ

大おほいなる彼の身体からだが

憎にくかりき

その前にゆきて物を言ふ時

実務には役に立たざるうた人^{びと}と

我を見る人に

金借りにけり

遠くより笛の音^ねきこゆ

うなだれてある故^{ゆゑ}やらむ

なみだ流るる

それもよしこれもよしとてある人の

その気がるさを

欲^ほしくなりたり

死ぬことを

持薬ぢやくをのむがごとくにも我はおもへり

心いためば

路傍みちばたに犬ながながと吠呻あくびしぬ

われも真似まねしぬ

うらやましさに

真剣まけんになりて竹もて犬を撃うつ

小児せうにの顔を

よしと思へり

ダイナモの

重き唸りのこちよきよ

あはれこのごとく物を言はまし

剽軽へうきんの性さがなりし友の死顔の

青き疲れが

いまも目にあり

気の変る人に仕つかへて

つくづくと

わが世がいやになりにけるかな

龍りょうのごとくむなしき空をどに躍り出いでて

消えゆく煙

見れば飽あかなく

こころよき疲れなるかな

息もつかず

仕事をしたる後のちのこの疲れ

空そらねいりなまあくび寝入生唾呻など

なぜするや

思ふこと人にさとらせぬため

箸はしと止めてふつと思ひぬ

やうやくに

世のならはしに慣れにけるかな

朝はやく

婚期こんきを過ぎし妹の

恋文こひがみめける文ふみを読めりけり

しつとりと

水を吸すひたる海綿かいめんの

重おもさに似たる心地こころちおぼゆる

死ね死ねと己おのれを怒いかり

もだしたる

心の底の暗きむなしさ

けものめく顔あり口をあけたてす
とのみ見てゐぬ
人の語るを

親と子と

はなればなれの心もて静かむかに対ふ
気まづきや何なぞ

かの船の

かの航海の船客せんかくの一人にてありき
死にかねたるは

目の前の菓子皿くわしざらなどを

かりかりと嘸かみてみたくなりぬ

もどかしきかな

よく笑ふ若き男の

死にたらば

すこしはこの世さびしくもなれ

何がなしに

息いききれるまで駆かけ出だしてみたくなりたり

草原くさはらなどを

あたらしき背広など着て

旅をせむ

しかく今年ことしも思ひ過ぎたる

ことさらに燈火ともしびを消して

まぢまぢと思ひてゐしは

わけもなきこと

浅草りょううんかくの凌雲閣のいただきに

腕組みし日の

長き日記にきかな

尋常じんじやうのおどけならむや

ナイフ持ち死ぬまねをする

その顔その顔

こそこそその話がやがて高くなり

ピストル鳴りて

人生終る

時ありて

子供のやうにたはむれす

恋ある人のなさぬ業わざかな

とかくして家を出いづれば

日光のあたたかさあり

息ふかく吸ふ

つかれたる牛のよだれは
たらたらと

千万年も尽きざるごとし

みちばた
路傍の切石きりいしの上に

腕く拱みて

空を見上ぐる男ありたり

何やらむ

おだや
穏かならぬ目付めつきして

つるはし
鶴嘴つるはしを打つ群を見てゐる

心より今日けふは逃げ去れり

病やまひある獣けもののごとき

不平逃げ去れり

おほどかの心来れり

あるくにも

腹に力のたまるがごとし

ただひとり泣かまほしさに

来て寝たる

宿屋やどやの夜具やぐのころよさかな

友よさは

乞食こじきの卑いやしき厭いとふなかれ
餓うゑたる時は我しかも爾しかりき

新せんしきインクのにほひ

栓せんぬ抜けば

餓うゑたる腹はらに沁しむがかなしも

かなしきは

喉のどのかわきをこらへつつ

夜寒よさむの夜具よぎにちぢこまる時

一度でも我われに頭あたまを下げさせし
人ひとみな死しねと

いのりてしこと

我に似し友の二人ふたりよ

一人は死に

一人は牢ろうを出いでて今病やむ

あまりある才を抱いだきて

妻のため

おもひわづらふ友をかなしむ

打明けて語りて

何か損そんをせしごとく思ひて

友とわかれぬ

どんよりと

くもれる空を見てゐしに

人を殺したくなりけるかな

ひとなみ
人並の才さいに過ぎざる

わが友の

深き不平もあはれなるかな

たれ
誰たれが見てもとりどころなき男来て

みば
威張みばりて帰りぬ

かなしくもあるか

はたらけど

はたらけど猶なほわが生活くらし楽にならざり

ぢつと手を見る

何もかも行末ゆくすゑの事みゆるごとき

このかなしみは

拭ぬぐひあへずも

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく

今日けふわれ切せちに金かねを欲ほりせり

水晶すゐしやうの玉をよろこびもてあそぶ

わがこの心
何なにの心ぞ

事もなく

且かつこころよく肥こえてゆく

わがこのごろの物足らぬかな

大いなる水晶の玉を

ひとつ欲ほし

それにむかひて物を思はむ

うぬ惚ぼるる友に

合あひづち槌うちてゐぬ

施与ほどこしをするごとき心に

ある朝のかなしき夢のさめぎはに

鼻いに入り来きし

味噌みそを煮にる香かよ

こつこつと空地あきちに石をきざむ音

耳みみにつき来きぬ

家いえに入るまで

何なにがなしに

頭あたまのなかに崖がけありて

日毎ひごとに土のくづるるごとし

遠方えんぱうに電話の鈴りんの鳴るごとく

今日けふも耳鳴る

かなしき日かな

垢あかじみし衿あはせの襟えりよ

かなしくも

ふるさとの胡桃くるみや焼くるにほひす

死にたくてならぬ時あり

はばかりに人目を避さけて

怖こはき顔する

一隊の兵を見送りて

かなしかり

何ぞ彼等なにのうれひ無なげなる

邦人くにびとの顔たへがたく卑いやしげに

目にうつる日なり

家にこもらむ

この次の休日やすみに一日寝てみむと

思みひすとせごしぬ

三年このかた

或る時のわれのこころを

焼きたての

麵ぼん麩ぼんに似たりと思ひけるかな

たんたらたらたんたらたらと

雨あまだれ滴たれが

痛むあたまにひびくかなしき

ある日のこと

室へやの障子しやうじをはりかへぬ

その日はそれにて心なごみき

かうしては居をられずと思ひ

立ちにしが

おもて
戸外に馬の嘶いななきしまで

気ぬけして廊下らうかに立ちぬ
あららかに扉ドアを推おせしに
すぐ開あきしかば

ぢつとして

黒はた赤のインク吸ひ
堅くかわける海綿かいめんを見る

誰たれが見ても

われをなつかしくなるごとき

長き手紙を書きたき夕ゆふへ

うすみどり

飲めば身体からだが水のごと透すきとほるてふ

薬はなきか

いつも睨にらむランプに飽あきて

三日みかばかり

蠟燭らふそくの火にしたしめるかな

人間のつかはぬ言葉

ひよつとして

われのみ知れるごとく思ふ日

あたらしき心もとめて

名も知らぬ

街など今日けふもさまよひて来きぬ

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

花を買きひ来て

妻つまとしたしむ

何なにすれば

此ここ処に我ありや

時にかく打うち驚おどろきて室へやを眺なむる

人ありて電車のなかに唾つばを吐はく

それにも

心いたまむとしき

夜明けまであそびてくらす場所が欲し^ほ

家^{いへ}をおもへば

こころ冷^{つめ}たし

人みなが家^{いへ}を持つてふかなしみよ

墓^いに入るごとく

かへりて眠る

何かひとつ不思議を示し

人みなのおどろくひまに

消えむと思ふ

人といふ人のところに

一人づつ囚人しうじんがゐて

うめくかなしき

叱しかられて

わつと泣き出すだ子供心

その心にもなりてみたきかな

盗むてふことさへ悪あしと思ひえぬ

心はかなし

かくれ家がもなし

放^{はな}たれし女のごときかなしみを

よわき男の

感^{かん}ずる日なり

庭^{にはいし}石に

はたと時計をなげうてる

昔のわれの怒^{いか}りいとしも

顔あかめ怒^{いか}りしことが

あくる日は

さほどにもなきをさびしがるかな

いらだてる心よ汝なれはかなしかり

いざいざ

すこしあくび呟呻などせむ

女あり

わがいひつけに背そむかじと心を碎くだく

見ればかなしも

ふがひなき

わが日ひの本もとの女等をんならを

秋雨あきよめの夜よにののしりしかな

男とうまれ男と交まじり

負けてをり

かるがゆるゑにや秋が身に沁しむ

わが抱いだく思想はすべて

金かねなきに困いんするごとし

秋の風吹く

くだらない小説を書きてよろこべる

男あは憐あはれなり

初はつあき秋の風

秋の風

今日けふよりは彼かのふやけたる男に

口を利^きかじと思ふ

はても見えぬ

真直^{ますぐ}の街をあゆむごとき

こころを今日は持ちえたるかな

何事も思ふことなく

いそがしく

暮らせし一日^{ひとひ}を忘れじと思ふ

何事も^{かねかね}金とわらひ

すこし^へ経て

またも^{には}俄かに不平つ^くのり来

誰たそ我われに

ピストルにても撃うてよかし

伊藤のごとく死にて見せなむ

やとばかり

桂かつら首相に手とられし夢みて覚さめぬ

秋の夜の二時

煙

病やまひのごと

思郷しきやうのこころ湧わく日なり

目にあをぞらの煙けむりかなしも

己おのが名をほのかに呼びて

涙せし

十四じふしの春にかへる術すべなし

青空に消えゆく煙

さびしくも消えゆく煙

われにし似るか

かの旅の汽車の車掌しやしやうが

ゆくりなくも

我が中学の友なりしかな

ほとぼしる唧筒ポンプの水の

心地こちよさよ

しばしは若きころもて見る

師も友も知らで責せめにき

謎なぞに似る

わが学業のおこたりの因もと

教室の窓より遁にげて

ただ一人

かの城址しろあとに寝ねに行きしかな

不こ来ず方かたのお城の草くさに寝ねころびて

空そらに吸すはれし

十五じふごの心こころ

かなしみといはばいふべき

物の味あじ

我われの嘗なめしはあまりに早はやかり

晴はれし空あふ仰あげばいつも

口くち笛ふえを吹ふきたくなりて

吹ふきてあそびき

夜寝ても口笛吹きぬ

口笛は

十五の我の歌にしありけり

よく叱しかる師ありき

髯ひげの似たるより山羊やぎと名づけて

口真似もしき

われと共ともに

小鳥に石を投げて遊ぶ

後備こうびたいぬ大尉の子もありしかな

城址しろあとの

石いしに腰掛こしかけ

禁制この木の实みをひとり味あぢはひしこと

その後のちに我われを捨てし友ともも

あの頃ときは共に書ふみよ読み

ともに遊あそびき

学校としよぐらの図書庫としよぐらの裏うらの秋あきの草くさ

黄きなる花はな咲さきし

今いまも名な知しらず

花はな散ちれば

先^まづ人さきに白^{ふく}の服^き着^いて家^い出^いづる
我^{わが}にてありしか

今は亡^なき姉^{あね}の恋^{こひ}人^{ひと}のおとうとと
な^なかよ^よくせ^せしを
か^かなしと思^{おも}ふ

夏^{なつ}休^{やす}み果^はててそのま^まま
か^かへり来^こぬ
若^{わか}き英^{えい}語^ごの教^{きょう}師^しもあ^ありき

ス^すト^とラ^らイ^いキ^き思^{おも}ひ出^いでても
今^{いま}は早^{はや}や吾^{われ}が血^ち躍^どら^らず

ひそかに淋さびし

もりをか
盛岡の中学校の

バルコン
露台の

てすり
欄干に最一度我を倚よらしめ

神有りと言ひ張る友を

説ときふせし

みちぼた
かの路傍の栗の樹きの下もと

西風に

うちまるおほぢ
内丸大路の桜の葉

かきこそ散るを踏ふみてあそびき

そのかみの愛読の書しよよ

おほかた
大方は

今は流行はやらずなりにけるかな

石ひとつ

坂をくだるがごとくにも

我けふの日に到り着きたる

愁うれひある少年せうねんの眼うらやに羨うらやみき

小鳥の飛ぶを

飛びてうたふを

解剖ふわけせし

蚯蚓みみずのいのちもかなしかり

かの校庭もくさくの木柵もとの下

かぎりなき知識よくの慾よくに燃ゆる眼を

姉いたは傷いたみき

人恋いとふるかと

蘇峯そほうの書しよを我われに薦すすめし友早く

校かうを退しりぞきぬ

まづしさのため

おどけたる手つきをかしと

我のみはいつも笑ひき
博学の師を

自しが才さいに身みをあやまちし人のこと
かたりきかせし
師もありしかな

そのかみの学校一いっのなまけ者
今は真ま面目じめに
はたらきて居をり

一握いっくわくの砂
田の舎なめく旅りょの姿すがたを
三み日かばかり都みやこに曝さらし

かへる友かな

茨島ばらしまの松の並木の街道を

われと行きし少女をとめ

才さいをたのみき

眼を病みて黒き眼鏡めがねをかけし頃

その頃よ

一人泣くをおぼえし

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす

友みな己おのが道をあゆめり

先さきんじて恋のあまさと

かなしきを知りし我なり

先おんじて老ゆ

興きよう来きたれば

友なみだ垂たれ手を揮ふりて

醉ゑひ漢どれのごとくなりて語りき

人ごみの中をわけ来くる

わが友の

むかしながらの太ふとき杖つゑかな

見よげなる年賀の文ふみを書く人と

おもひ過ぎにき

みとせ
三年ばかりは

夢さめてふつと悲しむ

わが眠り

昔のごとく安からぬかな

そのむかし秀才しうさいの名の高かりし

友牢らうにあり

秋のかぜ吹く

ちかめ
近眼にて

おどけし歌をよみ出^いでし
茂雄^{しげを}の恋もかなしかりしか

わが妻のむかしの願ひ

音楽のことにかかりき

今はうたはず

友はみな或^{ある}日^ひ四方^{しほう}に散^ちり行^ゆきぬ

その後^{のち}八年^{やとせ}

名^な挙^あげしもなし

わが恋を

はじめて友にうち明^{よる}けし夜^{よる}のことなど

思ひ出づる日

糸切れし紙鳶たこのごとくに
若き日の心かろくも
とびさりしかな

二

ふるさとの訛なまりなつかし
停車場ていしやばの人ごみの中に
それを聴ききにゆく

やまひある獣けもののごとき

わがこころ

ふるさとのこと聞けばおとなし

ふと思ふ

ふるさとにゐて日毎ひごとき聴ききし雀すずめの鳴くを

三年みとせ聴かざり

亡なくなれる師がその昔

たまひたる

地理の本など取りいでて見る

その昔

小学校の柂屋根まさやねに我が投げし鞠まり

いかにかなりけむ

ふるさとの

かの路傍みちばたのすて石よ

今年も草に埋うづもれしらむ

わかれをれば妹いもいとしも

赤き緒をの

下駄げたなど欲ほしとわめく子なりし

ふつか
二日前ふつかに山の絵見ゑしが

けさ
今朝けさになりて

にはかに恋しふるさとの山

飴売あめうりのチャルメラ聴きけば

うしなひし

をさなき心ひろへるごとし

このごろは

母も時とき時ときふるさとのことを言いひ出いづ

秋いに入れるなり

それとなく

郷里くりにのことなど語いり出いでて

秋よの夜よに焼もく餅もちのにほひかな

かにかくにしふたみむら渋民村は恋しかり

おもひでの山

おもひでの川

田も畑はたも売りて酒のみ

ほろびゆくふるさと人びとに

心寄する日

あはれかの我の教へし

子等こらもまた

やがてふるさとをす棄てて出いづるらむ

ふるさとを出いで来きし子等の

相会あいあひて

よろこぶにまさるかなしみはなし

石をもて追はるるごとく

ふるさとを出いでしかなしみ

消ゆる時なし

やはらかに柳あをめる

北上きたかみの岸きし辺目に見ゆ

泣けとごとくに

ふるさとの

村医そんいの妻のつつましき櫛卷くしまきなども

なつかしきかな

かの村の登記所とうきしよに来て

肺病はいやみて

間もなく死にし男もありき

小学の首席を我あらせと争ひし

友のいとなむ

木賃宿きちんやどかな

千代治等ちよぢらも長ちやうじて恋し

子を拳あげぬ

わが旅にしてなせしごとくに

ある年の盆ぼんの祭に

衣貸きぬかさむ踊れと言ひし

女を思ふ

うすのろの兄と

不具かたはの父もてる三太さんたはかなし

夜よるも書読ふみよむ

我と共に

栗毛くりげの仔馬こうま走らせし

母の無き子の盗癖ぬすみぐせかな

おほがた
大形の被布ひふの模様ようようの赤あかき花はな

今いまも目めに見みゆ

六む歳つの日ひの恋こひ

その名なさへ忘わすられし頃ころ

へうぜん
飄然へうぜんとふるささととにこ来きて

せき
咳せきせし男おとこ

いぢわる
意地悪いぢわるの大工だいこうの子こなどなどももかなかなししかり

いくさ
戦いくさに出いででしが

生なきててかかへへららず

肺はいをを病やむ

極ごく道だう地ぢ主ぬしのそ総そう領りやうの

よめとりの日の春の雷らいかな

宗そう次じろ郎らうに

おかねが泣なきて口く説どき居をり
大だい根こんの花白はきゆふぐれ

小せう心しんの役場やくばの書記しきの

気きの狂ふれしう噂はさに立たてる

ふるさとの秋

わが従いとこ兄あに

野山のの獵かりに飽あきしのち後ご

酒のみ家いへ売り病やみて死いにしかな

我ゆきて手をとれば

泣なきてしづまりき

酔よひて荒あほれしそのかみの友

酒のめば

刀かたなをぬきて妻を逐おふ教師けうしもありき

村を逐おはれき

年としごとに肺病はいびやうやみの殖ふえてゆく

村に迎へし

若き医者かな

ほたる狩がり

川にゆかむといふ我を

山路やまちにさそふ人にてありき

馬鈴薯ばれいしょのうす紫の花に降ふる

雨を思へり

都みやこの雨に

あはれ我がノスタルジヤは

金きんのごと

心に照れり清くしみらに

友として遊ぶものなき

性悪しやうわるの巡査の子等こらも

あはれなりけり

閑古鳥かんこどり

鳴く日となれば起おこるてふ

友のやまひのいかになりけむ

わが思ふこと

おほかたは正ただしかり

ふるさとのたより着つける朝あしたは

今日聞けば

かの幸さちうすきやもめ人びと
きたなき恋に身いを入るるてふ

わがために
なやめる魂たまをしづめよと
讚美歌うたふ人ありしかな

あはれかの男のごときたましひよ
今は何処いづこに
何を思ふや

わが庭つづじの白つぎき躑つづじ躑つづじを
薄月うすづきの夜よに

折^をりゆきしことな忘れそ

わが村に

初めてイエス・クリストの道を説^ときたる
若き女かな

霧ふかき好摩^{かうま}の原^{はら}の

停車場の

朝の虫こそすずろなりけれ

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え来^くれば
襟^{えり}を正^{ただ}すも

ふるさとの土をわが踏めば

何がなしに足かろ軽くなり

心おも重れり

ふるさとに入りて先まづ心いた傷むかな

道広くなり

橋もあたらし

見もしらぬ女教師をんなけうしが

そのかみの

わが学舎まなびやの窓に立てるかな

かの家のかの窓にこそ

春の夜を

ひでこ

秀子とともに蛙聴きけれ

かはづき

そのかみの神童の名の

しんどう

かなしさよ

ふるさとに来て泣くはそのこと

ふるさとの停車場路の

ていしやばみち

川ばたの

くるみ

胡桃の下に小石拾へり

ひろ

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

秋風のころよさに

ふるさとの空とほ遠みかも

高たかき屋やにひとりのぼりて

愁うれひて下くだる

皎かうとして玉をあぎむく小せうじん人も

秋あき来といふに

物を思へり

かなしきは

秋風ぞかし

稀まれにのみ湧わきし涙の繁しじに流るる

青に透すく

かなしみの玉に枕まくらして

松のひびきを夜もすがら聴きく

神寂さびし七山ななやまの杉

火のごとく染めて日入いりぬ

静かなるかな

そを読めば

愁^{うれ}ひ知るといふ書^ふ焚^{みた}ける
いにしへ人の心^{びと}よろしも

ものなべてうらはかなげに

暮れゆきぬ

とりあつめたる悲しみの日は

水^{みづ}潦^{たまり}

暮れゆく空とくれなるの紐^{ひも}を浮べぬ

秋雨^{あきさめ}の後^{のち}

秋立つは水にかも似る

洗^{あら}はれて

思ひことごと新しくなる

愁^{うれ}ひ来て

丘^{かみ}にのぼれば

名も知らぬ鳥^{ついで}啄^{ついで}めり赤^{あか}き茨^{あざ}の実^み

秋^{あき}の辻^{つじ}

四^よすぢの路^{みち}の三^{さん}すぢへと吹^ふきゆく風^{かぜ}の

あと見^みえずかも

秋^{あき}の声^{こゑ}まづいち早く耳^{みみ}に入^いる

かか^かる性^{さが}持^もつ

かなしむべかり

目になれし山にはあれど

秋来^くれば

神や住まむとかしこみて見る

わが為^なさむこと世に尽^つきて

長き日を

かくしもあはれ物を思ふか

さらさらと雨落ち来^{きた}り

庭の面^もの濡^ぬれゆくを見て

涙わすれぬ

ふるさとの寺の御廊みらうに

踏ふみにける

小櫛をぐしの蝶てふを夢にみしかな

こころみに

いとけなき日の我となり

物言ひてみむ人あれと思ふ

はたはたと黍きびの葉鳴れる

ふるさとの軒端のきばなつかし

秋風吹けば

摩すれあへる肩のひまより

はつかにも見きといふさへ
日記にきに残れり

風流男みやびをは今も昔も

泡雪あわゆきの

玉手たまでさし捲まく夜よにし老おゆらし

かりそめに忘れても見まし

石だたみ

春生おふる草うもに埋るるがごと

その昔ゆりかご揺籃かごに寝て

あまたたび夢にみし人か

切せちになつかし

神無月かみなづき

岩手いはての山の

初雪まゆの眉まゆにせまりし朝を思ひぬ

ひでり雨さらさら落ちて

前栽せんざいの

萩はぎのすこしく乱みだれたるかな

秋あきの空廓くわくれう寥として影もなし

あまりにさびし

烏からすなど飛べ

雨後うごの月

ほどよく濡ぬれし屋根瓦やねがはらの

そのところどころ光るかなしき

われ饑うゑてある日に

細き尾を掉ふりて

饑うゑて我を見る犬の面つらよし

いつしかに

泣くといふこと忘れたる

我泣かしむる人のあらじか

汪汪わうぜんとして

ああ酒のかなしみぞ我きたに来れる
立ちて舞まひなむ

蝉鳴いとどなく

そのかたはらの石きよに踞し
泣き笑ひしてひとり物言ふ

力なく病やみし頃ころより

口くちすこし開あきて眠ねむるが
癖くせとなりにき

人ひとり得うるに過ぎざる事をもて

大願たいぐわんとせし

若きあやまち

物怨えずる

そのやはらかき上目うはめをば

愛めづとことさらつれなくせむや

かくばかり熱あつき涙は

初恋の日にもありきと

泣く日またなし

長く長く忘れし友に

会ふごとき

よろこびをもて水の音聴きく

秋の夜の

鋼鉄はがねの色の大空に

火を噴はく山もあれなど思ふ

岩手山いはてやま

秋はふもとの三方さんぽうの

野に満つる虫を何なにと聴くらむ

父のごと秋はいかめし

母のごと秋はなつかし

家持いへたぬ児こに

秋来くれば

恋こふる心のいとまなさよ

夜よもい寝ねがてに雁かり多く聴く

長月ながつきも半なかばになりぬ

いつまでか

かくも幼うちいく打出うちいでずあらむ

思ふてふこと言はぬ人の

おくり来きし

忘れな草ぐさもいちじろかりし

秋の雨に逆さかぞ反りやすき弓ゆみのごと

このごろ

君のしたしまぬかな

松の風夜昼よひるひびきぬ

人訪とはぬ山の祠ほこらの

石馬いしうまの耳に

ほのかなる朽木くちきの香かをり

そがなかの蕈たけの香りに

秋やや深し

時雨しぐれ降るごとき音して

木伝こづたひぬ

人によく似し森の猿さるども

森の奥

遠きひびきす

木のうろうすに白うすひく侏儒しゅじゆの国きにかも来きし

世のはじめ

まづ森ありて

半神はんしんの人ひとそが中なに火ひや守まもりけむ

はてもなく砂すなうちつづく

戈壁ゴビの野のに住すみたまふ神かみは

秋の神かも

あめつちに

わが悲しみと月光げつくわうと

あまねき秋の夜よとなれりけり

うらがなしき

夜の物ものの音ね洩もれ来くるを

拾ひろふがごとくさまよひ行ゆきぬ

旅の子の

ふるさときに来て眠ねるがに

げげに静しずかにも冬ふゆの来きしかな

忘れがたき人人

一

潮しほかをる北の浜はまべ辺の
砂山はまなすのかの浜はまなす薔薇よ
今年も咲けるや

たのみつる年の若かぞさを数へみて
指を見つめて
旅たびがいやになりき

三度^{みたび}ほど

汽車の窓よりながめたる町の名なども
したしかりけり

函館^{はこだて}の床屋^{とこや}の弟子^{でし}を

おもひ出^いでぬ

耳^そ剃^そらせるがこころよかりし

わがあとを追^きひ来て

知^しれる人もなき

辺^{へんど}土^どに住^すみし母^{はは}と妻^{つま}かな

船^{ふね}に酔^よひてやさしくなれる

いもうとの眼見ゆめ
津軽つがるの海を思へば

目を閉ぢてと

傷心しやうしんの句を誦ずしてゐし

友の手紙のおどけ悲しも

をさなき時

橋らんかんの欄干くそぬに糞塗ぬりし

話も友はかなしみてしき

おそらくは生涯しやうがい妻をむかへじと

わらひし友よ

今もめとらず

あはれかの

眼鏡めがねの縁ふちをさびしげに光らせてゐし

女教師よ

友われに飯めしを与へき

その友に背そむきし我の

性さがのかなしさ

函館はこだての青柳町あをやなぎちやうこそかなしけれ

友の恋歌こひうた

矢ぐるまの花

ふるさとの

麦のかをりを懐かしむ

女の眉にこころひかれき

あたらしき洋書の紙の

香をかぎて

一途に金を欲しと思ひしが

しらなみの寄せて騒げる

函館の大森浜に

思ひしことども

朝な朝な

支那しなの俗歌ぞくかをうたひ出いづる

まくら時計を愛めでしかなしみ

漂泊へうはくの愁うれひを叙じよして成ならざりし

草稿さうかうの字の

読みがたさかな

いくたびか死なむとしては

死なざりし

わが来こしかたのをかしく悲し

函館ぐわんくうの臥牛やまの山やまの半腹はんぷくの

碑ひの漢詩からうたも

なかば忘れぬ

むやむやと

口くちの中うちにてたふとげの事ことをつひや呟つぶやく

乞食こじきもありき

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく

山いに入りいにき

神のごとき友

巻煙草まきたばこ口くちにくはへて

浪なみあらし

磯いその夜霧よぎりに立ちし女をよ

演習えんじゆのひまにわざわざ

汽車きしやに乗りて

訪とひ来きし友ともとのめる酒さけかな

大川おほかはの水みづの面おもてを見るみることに

郁雨いくうよ

君きみのなやみを思おもふ

智慧ちゑとその深ふかき慈悲じひとを

もちあぐみ

為なすこともなく友ともは遊あそべり

こころざし得ぬ人人の
あつまりて酒のむ場所が
我が家なりしかな

かなしめば高く笑ひき

酒をもて

悶を解すといふ年上の友

若くして

数人の父となりし友

子なきがごとく酔へばうたひき

さりげなき高き笑ひが

酒とともに

我が腸はらわたに沁しみにけらしな

呟あくびか
呟あくびみ

夜汽車の窓に別れたる

別れが今は物足ものたらぬかな

雨に濡れし夜汽車の窓に

映うつりたる

山間やまあひの町のともしびの色

雨つよく降る夜の汽車の

たえまなく雫しづく流るる
窓硝子まじガラスかな

真夜中の

俱知安くちあんえき駅おに下りゆきし

女の鬢びんの古ききず痕あと

札幌さつぽろに

かの秋われの持てゆきし

しかして今も持てるかなしみ

アカシヤの街なみき榭せにポプラに

秋の風

吹くがかなしと日記にきに残れり

しんとして幅広まちき街の

秋の夜の

玉蜀黍たうもろこしの焼くるにほひよ

わが宿の姉いもとしと妹のいさかひに

初夜しよや過ぎゆきし

札幌の雨

石狩いしかりの美びく国といへる停車場の

柵さくに乾ほしてありし

赤あかき布きれ片かな

かなしきは小樽をたるの町よ

歌ふことなき人人の

声の荒さよ

泣くがごと首ふるはせて

手の相さうを見せよといひし

易者えきしやもありき

いささかの銭ぜにか借りてゆきし

わが友の

後姿うしろすがたの肩かたの雪かな

世わたりの拙つたなきことを

ひそかにも

誇ほこりとしたる我にやはあらぬ

汝なが瘦やせしからだはすべて

謀む叛ほん気ぎのかたまりなりと

いはれてしこと

かの年のかの新聞の

初雪の記事を書きしは

我なりしかな

椅子いすをもて我を撃うたむと身みがま構へし

かの友の酔ゑひも
今は醒さめつらむ

負けたるも我にてありき
あらそひの因もとも我なりしと
今は思へり

殴なぐらむといふに
殴れとつめよせし
昔の我のいとほしきかな

一握の砂

汝なれみたび三度
この咽喉のどに劍けんを擬ぎしたりと

彼告別かれこくべつの辞じに言へりけり

あらしそひて

いたく憎にくみて別れたる

友をなつかしく思ふ日も来きぬ

あはれかの眉まゆの秀ひいでし少年よ

弟と呼べば

はつかに笑ゑみしが

わが妻つまに着物縫ぬはせし友ありし

冬早く来くる

植民地かな

平手^{ひらて}もて

吹雪^{ふぶき}にぬれし顔を拭^ふく

友共産を主義とせりけり

酒のめば鬼^{おに}のごとくに青かりし

大いなる顔よ

かなしき顔よ

樺太^{からふと}に入りて

新しき宗教を創^{はじ}めむといふ

友なりしかな

治をさまれる世の事ことな無さに
飽あきたりといひし頃こそ
かなしかりけれ

共同の薬屋開き

儲まうけむといふ友なりき

詐さ欺ぎせしといふ

あをじろき頬ほほに涙を光らせて

死をば語りき

若あきびとき商人

子おを負ひて

雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉まゆかな

敵として憎みし友と

やや長く手をば握にぎりき

わかれといふに

ゆるぎ出いづる汽車の窓より

人先ひとさきに顔を引きしも

負まけざらむため

みぞれ降る

石狩いしかりの野の汽車に読みし

ツルゲエネフの物語かな

わが去れる後の樽のちうはさを

おもひやる旅出たびではかなし

死しににゆくごと

わか来きてふと瞬またたけば

ゆくりなく

つめたきものの頬をつたへり

忘れ来きし煙草たばこを思ふ

ゆけどゆけど

山なほ遠き雪の野の汽車

うす紅あかく雪に流れて

入りひかげ
入日影

あらの
曠野の汽車の窓を照てらせり

腹すこし痛いたみ出いでしを

しのびつつ

ちやうろ
長路の汽車にのむ煙草たばこかな

のりあひ
乗合の砲兵士官の

さや
劍の鞘

がちやりと鳴るに思ひやぶれき

名のみ知りて縁えんもゆかりもなき土地の
宿屋やどや安けし

我が家いへのごと

伴つれなりしかの代議士の

口あける青き寐顔ねがほを

かなしと思ひき

今夜こそ思ふ存分ぞんぶん泣いてみむと

泊とまりし宿屋の

茶のぬるさかな

水蒸気

列車の窓に花のごと凍いてしを染そむる
あかつきの色

ごおと鳴る凧こがらしのあと

乾かわきたる雪舞ひ立ちて

林を包つつめり

空知川雪そらちがはに埋うもれて

鳥も見えず

岸きし辺の林に人ひとりゐき

寂莫せきぼくを敵とし友とし

雪のなかに

長き一生を送る人もあり

いたく汽車に疲れて猶もなほ

きれぎれに思ふは

我のいとしさなりき

うたふごと駅の名呼びし

柔和にうわなる

若きえきふ駅夫の眼をも忘れず

雪のなか

処しよしよ処しよしよに屋根見えて

煙突えんとつの煙けむりうすくも空にまよへり

遠くより

笛ふえながながとひびかせて

汽車今とある森林いに入る

何事も思ふことなく

ひいちにち
日一日

汽車のひびきに心まかせぬ

さいはての駅おに下り立ち

雪あかり

さびしき町いにあゆみ入りにき

しらしらと氷かがやき

千鳥なく

鉏路くしろの海の冬の月かな

こほりたるインクの鑿びんを

火に翳かざし

涙ながれぬともしびの下もと

顔とこゑ

そののみ昔に変わらざる友にも会ひき

国の果はてにて

あはれかの国のはてにて

酒のみき

かなしみの滓をりを啜すするごとくに

酒のめば悲しみ一時に湧わき来くるを

寐ねて夢みぬを

うれしとはせし

出だしぬけの女の笑ひ

身しに沁しみき

厨くりやに酒の凍こほる真夜中

わが酔よひに心いたため

うたはざる女ありしが

いかになれるや

小奴こやつこといひし女の

やはらかき

耳朶みみたぼなども忘れがたかり

よりそひて

深夜しんやの雪の中に立つ

女の右手めてのあたたかさかな

死にたくはないかと言へば

これ見よと

咽喉のんどの瘻きずを見せし女かな

芸事げいごとも顔も

かれより優すぐれたる

女あしざまに我を言へりとか

舞まへといへば立ちて舞ひにき

おのづから

悪酒あくしゆの酔よひにたふるるまでも

死ぬばかり我が酔よふをまちて

いろいろの

かなしきことを囁ささやきし人

いかにせしと言へば

あをじろき酔ゑひぎめの

面おもてに強しひて笑ゑみをつくりき

かなしきは

かの白玉しらたまのごとくなる腕に残せし

キスの痕あとかな

酔ゑひてわがうつむく時も

水ほしと眼めひらく時も

呼びし名なりけり

火をしたふ虫のごとくに

ともしびの明るき家に
かよひ慣れなにき

きしきしと寒さに踏めば板いた軋ぎむ
かへりの廊下の
不意のくちづけ

その膝ひざに枕まくらしつつも
我がこころ

思ひしはみな我のことなり

さらさらと氷の屑くづが
波に鳴る

磯の月夜のゆきかへりかな

死にしとかこのごろ聞きぬ

恋がたき

才さいあまりある男なりしが

ととせ
十年まへに作りしといふ漢詩からうたを

酔よへば唱となへき

旅に老おいし友

吸ふごとに

鼻びがびたりと凍こほりつく

寒き空気を吸ひたくなりぬ

波もなき二月の湾わんに

白塗しろぬりの

外国船が低く浮かべり

三味線さみせんの絃いとのきれしを

火事のごと騒ぐ子ありき

大雪よの夜に

神のごと

遠く姿をあらはせる

阿寒あかんの山の雪のあけぼの

郷里くににゐて

身投げせしことありといふ
女の三味さみにうたへるゆふべ

葡萄色えびいろの

古き手帳ていさふにのこりたる
かの会合あひびきの時ところと処ところかな

よごれたる足袋たび穿はく時の
気味きみわるき思おもひに似にたる
思出おもひでもあり

わが室へやに女泣なみきしを

小説のなかの事かと
おもひ出づる日

浪淘沙

らうたうさ

ながくも声をふるはせて
うたふがごとき旅なりしかな

二

いつなりけむ

夢にふと聴きてうれしかりし
その声もあはれ長く聴かざり

頬ほの寒さき

流離りゅうりの旅の人として

路問みちとふほどのこと言ひしのみ

さりげなく言ひし言葉は

さりげなく君も聴きつらむ

それだけのこと

ひややかに清なめいしき大理石いしに

春の日の静かに照るは

かかる思ひならむ

世の中の明るさのみを吸ふくごとき

黒き瞳ひとみの

今も目にあり

かの時に言ひそびれたる

大切の言葉は今も

胸にのこれど

真ましろ白なるラムプの笠かさの

瑕きずのごと

流離の記憶消しがたきかな

函館はこだてのかの焼跡やけあとを去りし夜よの

こころ残りを

今も残しつ

人がいふ

鬢びんのほつれのめでたさを

物書く時の君に見たりし

馬鈴薯ばれいしょの花咲く頃と

なれりけり

君もこの花を好きたまふらむ

山の子の

山を思ふがごとくにも

かなしき時は君を思へり

忘れをれば

ひよつとした事が思ひ出の種たねにまたなる
忘れかねつも

病やむと聞き

癒いえしと聞きて

四しひやくり百里のこなたに我はうつつなかりし

君に似し姿を街まちに見る時の

こころ躍をどりを

あはれと思へ

かの声を最^も一度聴かば

すつきりと

胸や霽^はれむと今朝^{けさ}も思へる

いそがしき生活^{くらし}のなかの

時折^{ときおり}のこの物おもひ

誰^{たれ}のためぞも

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出^いでなむ

死ぬまでに一度会はむと

言ひやらば

君もかすかにうなづくらむか

時として

君を思へば

安かりし心にはかに騒ぐかなしき

わかれ来て年としを重ねて

年としごとに恋しくなれる

君にしあるかな

石狩いしかりの都みやこの外の

君が家

林檎りんごの花の散りてやあらむ

長ながき文ふみ

三年みとせのうちみたびに三度来ぬき

私の書きしは四度よたびにかあらむ

手套を脱ぐ時

手套てぶくろを脱ぬぐ手ふと休やむ

何やらむ

こころかすめし思ひ出のあり

いつしかに

情をいつはること知りぬ^{じやう}
髭を立てしもその頃なりけむ^{ひげ}

朝の湯の

湯槽のふちにうなじ載せ^{ゆづね}^の

ゆるく息する物思ひかな^{いき}

夏来れば^く

うがひ葉の

病ある齒に沁む朝のうれしかりけり^{やまひ}^し

つくづくと手をながめつつ

おもひ出でぬ^い

キスが上手じやうずの女なりしが

さびしきは

色にしたしまぬ目のゆゑと

赤き花など買はせけるかな

新しき本を買ひ来て読むよ夜半はの

そのたのしきも

長くわすれぬ

旅たび七日なのか

かへり来きぬれば

わが窓の赤きインクの染しみもなつかし

こもんじよ
古文書のなかに見いでし

よごれたる

すひとりがみ
吸取紙をなつかしむかな

手にためし雪の融くるが

こちよく

わが寐飽きたる心には沁む

薄れゆく障子の日影

そを見つつ

こころいつしか暗くなりゆく

ひやひやと

夜は薬の香かのにほふ

医者が住いへみたるあとの家かな

まどガラス
窓硝子

塵ちりと雨くもとに曇りたる窓硝子にも

かなしみはあり

むとせ
六年ほど日ひごとひごと毎ひごとひごと日ひごとひごと毎ひごとひごとにかぶりたる

古き帽子も

棄すてられぬかな

こころよく

春のねむりをむさぼれる
目にやはらかき庭の草かな

あかれんぐわ
赤煉瓦遠くつづける高塀たかべいの

むらさきに見えて

春の日ながし

春の雪

銀座の裏の三階の煉瓦造づくりに

やはらかに降る

よごれたる煉瓦の壁に

降りて融とけ降りては融とくる

春の雪かな

目を病^やめる

若き女の倚^よりかかる

窓にしめやかに春の雨降る

あたらしき木のかをりなど

ただよへる

新開^{しんかい}町の春の静けさ

春の街^{まち}

見よげに書ける女名^{をんなな}の

門札^{かどふだ}などを読みありくかな

そことなく

みかん
蜜柑の皮の焼くるごときにはひ残りて

ゆふべ
夕となりぬ

にぎはしき若き女の集会の
あつまり

こゑ聴き倦みて

さびしくなりたり

何処やらに
どこ

若き女の死ぬごとき悩ましきあり
なや

春の霽降る
みぞれ

コニヤツクの酔よひのあととなる
やはらかき

このかなしみのすずろなるかな

白しろき皿さら

拭ふきては棚たなに重かさねゐる

酒場の隅すみのかなしき女

乾かわきたる冬ふゆの大路おほぢの

何いづく処ところやらむ

石炭酸せきたんさんののにほひひそめり

赤あか赤あかと入いり日ひうつれる

河ばたの酒場の窓の
白き顔かな

新しきサラダの皿さらの

酢すのかをり

こころに沁しみてかなしき夕ゆふへ

空色そらいろの饅びんより

山羊やぎの乳をつぐ

手のふるひなどいとしかりけり

すがた見の

息いきのくもりに消されたる

酔よひうるみの眸まみのかなしき

ひとしきり静かになれる

ゆふぐれの

厨くりやにのこるハムのにほひかな

ひややかに鑊びんのならべる棚たなの前

齒はせせる女を

かなしとも見き

やや長きキスを交かはして別きれ来し

深夜の街の

遠き火事かな

病院の窓のゆふべの

ほの白じろき顔かほにありたる

あは淡みおぼき見覚え

何時いつなりしか

かの大川おほかはの遊船いうせんに

舞まひし女をおもひ出でにけり

用もちもなき文ふみなど長く書きさして

ふと人ひとこひし

街まちに出でてゆく

しめらへる煙草たばこを吸へば

おほよその

わが思ふことも軽かろくしめれり

するどくも

夏の来きたるを感じつつ

雨後うごの小庭こにはの土の香かを嗅かぐ

すずしげに飾かざり立てたる

硝子屋ガラスやの前にながめし

夏の夜の月

君来るといふに夙とく起き

白シャツの
袖そでのよごれを気にする日かな

おちつかぬ我が弟の

このごろの

眼のうるみなどかなしかりけり

どこやらに杭くひ打つ音し

大桶おほをけをころがす音し

雪ふりいでぬ

人気ひとけなき夜よの事務室に

けたたましく

電話の鈴りんの鳴りて止みたり

目さまして

ややありて耳いに入り来きたる

真夜中すぎの話声かな

見てをれば時計とまれり

吸はるるごと

心はまたもさびしきゆに行く

朝朝あさあさの

うがひの料しろの水薬すみやくの

罎びんがつめたき秋あきとなりにけり

夷なだらかに麦の青める

丘の根の

小径こみちに赤をぐしき小櫛をぐしひろへり

裏山すぎふの杉生すぎふのなかに

斑まだらなる日影ひかげ這はひ入いる

秋のひるすぎ

港町

とろろと鳴きて輪を描くとび鳶あつをあつ圧せる

潮しほぐもりかな

こはるび
くもりガラス
小春日の曇硝子にうつりたる
とりかげ
鳥影を見て
すずろに思ふ

ひとならび泳げるごとき

いへいへ
たかひく
家の高低の軒に

冬の日の舞ふ

京橋の滝山町の
たきやまちやう

新聞社

ひ
灯ともる頃のいそがしさかな

よく怒る人にてありしわが父の
いか

日ごろ怒いからず
怒れと思ふ

あき風が電車のなかに吹き入いれし
柳やなぎのひと葉
手にとりて見る

ゆゑもなく海が見たくて

海に来ぬ

こころ傷いたみてたへがたき日に

たひらなる海につかれて
そむけたる

目をかきみだす赤き帯おびかな

今日逢あひし町の女の

どれもこれも

恋にやぶれて帰るごとき日

汽車の旅

とある野のなか中の停車場の

夏草かの香かのなつかしかりき

朝まだき

やつと間まに合あひし初秋はつあきの旅出たびでの汽車の

堅かたき麵めん麩ぼかな

かの旅の夜汽車の窓に

おもひたる

我がゆくすゑのかなしかりしかな

ふと見れば

とある林の停車場の時計とまれり

雨の夜よの汽車

わかれ来きて

あかりをぐら燈火小暗き夜もてあその汽車の窓に弄ぶ

青き林りんご檣よ

いつも来る

この酒肆さかみせのかなしきよ

ゆふ日赤赤あかあかと酒さに射いし入る

白き蓮沼はすぬまに咲くごとく

かなしみが

酔よひのあひだにはつきりと浮く

壁かべごしに

若き女の泣くをきく

旅の宿屋の秋の蚊帳かやかな

取りいでし去年こぞの裕あはせの

なつかしきにはひ身に沁しむ
初秋はつあきの朝

気にしたる左の膝ひざの痛みなど

いつか癒なほりて

秋の風吹く

売り売りて

手垢てあかきたなきドイツ語の辞書のみ残る

夏の末かな

ゆゑもなく憎にくみし友と

いつしかに親しくなりて

秋の暮れゆく

赤紙あかがみの表紙て手擦ずれし

国禁こくきんの

書ふみを行李かうりの底にさがす日

売とることを差し止められし

本の著者みちに

路みちにて会へる秋の朝かな

今日よりは

我も酒あふなど呷あふらむと思へる日より

秋の風吹く

だいかい
大海の

かたすみ
その片隅につらなれる島島の上に

秋の風吹く

うるみたる目と

ほくろ
目の下の黒子のみ

いつも目につく友の妻かな

いつ見ても

毛糸の玉をころがして

くつしたあ
鞆を編む女なりしが

葡萄色えびいろの

長椅子ながいすの上に眠りたる猫ねこほの白しろき

秋のゆふぐれ

ほそぼそと

其処そこら此処ここらに虫の鳴く

昼の野に来て読む手紙かな

夜よるおそく戸を繰くりをれば

白きもの庭を走れり

犬にやあらむ

夜の二時の窓の硝子ガラスを

うす紅あかく

染めて音なき火事の色かな

あはれなる恋かなと

ひとり眩つふやきて

夜半よはの火桶ひをけに炭すみそ添へにけり

真白ましろなるラムプの笠かさに

手をあてて

寒き夜にする物思ひかな

水のごと

身体からだをひたすかなしみに

葱ねぎの香かなどのまじれる夕ゆふべ

時ありて

猫のまねなどして笑ふ

三十路みそぢの友のひとり住ずみかな

気弱きよわなる斥候せきこうのごとく

おそれつつ

深夜の街を一人散歩す

皮膚ひふがみな耳にてありき

しんとして眠れる街まちの

重き靴音

夜^{よる}おそく停車場^{ていじやうば}に入り

立ち坐^{すわ}り

やがて出^いでゆきぬ帽^{ぼう}なき男

気がつけば

しつとりと夜霧^{よきり}下^おりて居^をり

ながくも街^{まち}をさまよへるかな

若^もしあらば煙草^{たばこ}恵^{めぐ}めと

寄^くりて来る

あとなし人^{ひと}と深夜^{しんや}に語る

あらの
曠野より帰るごとくに

帰り来ぬき

東京の夜をひとりあゆみてよ

銀行の窓の下なる

舗石しきいしの霜しもにこぼれし

青インクかな

ちよんちよんと

とある小藪こやぶに頬白ほほしろの遊ぶを眺む

雪の野やの路みち

十月の朝の空気に

あたらしく
息吸^すひそめし赤坊^{あかんぼ}のあり

十月の産病院の

しめりたる

長き廊下のゆきかへりかな

むらさきの袖垂^{そでた}れて

空を見上げゐる支^し那人^なありき

公園の午後

孩^{をさな}児の手ざはりのごとき

思ひあり

公園に来てひとり歩めばあゆ

ひさしぶりに公園に来て

友に会ひ

堅く手握り口疾かた くちどに語る

公園の木の間にこ ま

小鳥あそべるを

ながめてしばし憩いとこひけるかな

晴れし日の公園に来て

あゆみつつ

わがこのごろの衰おとろへを知る

思出のかのキスかとも

おどろきぬ

プラタヌの葉の散りて触れしを

公園の隅のベンチに

二度ばかり見かけし男

このごろ見えず

公園のかなしみよ

君の嫁とつぎてより

すでに七月来しななつきこともなし

公園のとある木蔭こかげの捨椅子すていすに

思ひあまりて

身をば寄せたる

忘れぬ顔なりしかな

今日街まぢに

捕吏ほりにひかれて笑ゑめる男は

マチ擦すれば

二尺ばかりの明るさの

中をよぎれる白き蛾がのあり

目をとちて

口笛かすかに吹きてみぬ
寐ねられぬ夜の窓にもたれて

わが友は

今日も母なき子を負ひて

かの城址しろあとにさまよへるかな

夜よるおそく

つとめ先よりかへり来きて

今死にしてふ児こを抱だけるかな

二三ふたみころゑ

いまはのきはに微かすかにも泣きしといふに

なみだ誘はるさそ

真白ましろなる大根の根の肥こゆる頃

うまれて

やがて死にし児このあり

おそ秋の空気を

三尺四方さんじゃくしほうばかり

吸ひてわが児の死にゆきしかな

死にし児の

胸に注射の針を刺す

医者の手もとにあつまる心

底知れぬ謎なぞに對むかひてあるごとし
死しじ児のひたひに
またも手をやる

かなしみのつよくいたらぬ

さびしさよ

わが児のからだ冷ひえてゆけども

かなしくも

夜明よあくるまでは残りゐぬ

息いききれし児の肌はだのぬくもり

一握の砂

一握の砂

底本：「日本文学全集 12 国木田独歩 石川啄木集」集英社

1967（昭和 42）年 9 月 12 日初版発行

1972（昭和 47）年 9 月 10 日 9 版発行

※冒頭の献辞と自序は、「啄木全集 第一巻」筑摩書房、1970（昭和 45）年 5 月 20 日初版第 4 刷発行から、補いました。

入力：j.utiyama

校正：浜野智

1998 年 8 月 11 日公開

2004 年 5 月 19 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。